研修概要

主体的･対話的で深い学びをめざす授業づくり

下関市立養治小学校

養治っ子が作成した
マスコットキャラクター

藤の花をイメージして

1　研究主題(副主題)の設定について

主体的・対話的で深い学びをめざす授業づくり
～自分の考えをもち、進んで表現できる子供の育成～

（１）昨年度までの経緯

前年度まで、本校では「豊かな感受性と明せきな知性をもち、仲よく楽しく学びぬく心身ともに健康な養治の子の育成」を学校教育目標に掲げ、その具現化を図ってきている。2017 年度からは、研究主題を「確かな学力を支える授業づくり～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～」として、共通理解を図りながら取り組み、一定の成果を得た。

さらに、確かな学力を支える継続活動として、校内の学力向上部と連携をしながら、朝学の充実（読書・視写タイム）や家庭との連携にも力を入れて取り組んできた。その結果、以下の点を昨年度までの成果として挙げている。

- 討論の仕方を身に付け、根拠を基に自分の考えを深めていく児童の姿が見られた。
- 話合いに積極的に参加し、自分の考えの変容や友達の意見による変容などを書く児童の姿が見られた。
- 書くことに抵抗感をもつ児童が減った。一方で、以下の点が課題として見えてきた。
- 発問により対話の深まりが違ってくるので、よりよい発問をする必要がある。
- 「振り返り」を生かす授業(子ども自身による評価(メタ認知)を価値付ける授業)を展開する。
- 書くための言葉(語彙)を増やすこと。さらに、導入された電子黒板やタブレット端末(iPad)を活用した授業を研修したいという意見も出された。

（２）本年度の主題設定理由

前年度の研究の成果と児童の実態より、児童は、「自らの考えをもって授業に臨み、友達や先生にその考えを伝え合うことで、学びがより一層楽しいものとなることを経験から知ることができた」ということが分かった。そのためには、「表現する力」をさらに伸ばし、学び合いを深めていくことが大切であるという反省が出ていた。そこで、今年度は直接的に学びの探究をめざす、

主体的･対話的で深い学びをめざす授業づくり

を研修主題として、「自分の考えをもち、その思いを相手に伝える方法を考えていくための方途を研究」することとした。その手立ての一つとして、ＧＩＧＡスクール構想による１人１台タブレット端末が導入されたことを機会に、児童と指導者がともにＩＣＴ機器を利活用することとした。また、児童の個に応じた学びの成長をめざし、表現力や話し合う力を高めていくための授業力の向上を考え、本年度の研究を進めていくこととした。

2　研究の仮説

児童の「表現力」を育成するためのアプローチの仕方は様々あるが、まず、本年度は１年次として、スタートアップ研究の柱を設定することとした。具体的には、昨年度まで研究した学習意欲を高める効果的な発問に加え、自分の思いや考えを表現していくための手立てとして、電子黒板やタブレット端末を使っての実践を主にして研究していく。そして、ＩＣＴ機器に慣れ、様々な教科や領域でのユーススキルのアップを基本に、各学級等でどのような使い方ができるのか、どの場面で使うのが効果的かなどを、児童の具体の姿を見取りながら実証的に研究していくことにした。

【研究仮説】

主体的・対話的につながる発問により学習意欲を高め、またＩＣＴ機器を利活用することで、児童の実態に応じた表現力や深い学びの実現を可能にし、個別の問題解決力を着実に伸ばすことができるだろう。

3　研究の内容

本年度研究に当たっては、主題解明に迫るために下記の点に留意して進めてきた。

（１）主体的・対話的で深い学びを支える１授業１工夫（授業改善）

学力定着のためには、日々の授業を充実させ（１授業１工夫）、児童一人一人が分かったと感じる確かな授業の保障が重要である。そのために、児童が見通しをもって粘り強く主体的に取り組み、そこから対話を引き出し、深い学びへ結び付けることのできる授業の工夫が必要である。

そこで、以下の３点を研究の柱として年間の校内研究を進めた。

・教師の発問は深い学びにつながったか。
・自分の考えを相手に伝える場面を設定したか。
・ICT機器を利活用する場面は適切であったか。

図1　端末の利活用

（２）学力向上部との連携

確かな学力の育成のためには、児童の実態などの現状把握が欠かせない。これまでも全校統一の学力向上プランを作成し、全国学力学習状況調査や学力定着状況確認問題などの結果を受けて、目標の見直しを図ってきた。

今年度も、全国学力学習状況調査や学力定着状況確認問題の結果を全教職員で共有し、日々の授業改善につなげていくことを目標とした。例えば、

学力分析のために実際の問題を解いてみて、解法のポイントや感想の情報を交換したり、互見授業を全学級で実施したりして取組を繋げている。

（３）ＩＣＴ機器を利活用した授業づくり

図2　ICT機器の利活用場面

話合いの活性化や表現力向上の手立ての一つとして、今年度から導入された児童個人のタブレット端末や、教室１基の電子黒板の利活用が考えられる。本年度は、まず、「ＩＣＴ教育の理解を深め、どのような場面で使えるか、どのように使うことが効果的なのか」という課題に取り組んだ。

そして、ＩＣＴ機器の利活用については視聴覚部との連携を図って情報提供やミニ研修を実施したり、市派遣のＩＣＴ教育支援員の活用について計画的に取り組んだ。

４　研究の成果と課題

（１）研究授業・互見授業

１人１授業を行い、研究主題に沿って、授業についての協議や意見交換を行った。全校体制での研究授業は年間２回実施。事前の公開授業オリエンテーションで、授業の内容、発問及びＩＣＴ機器の利活用部分についての検討と授業のポイントについて、研究主題を確認しながら効率よく研究授業が行えるよう配慮した。

実際の公開授業では、児童が主体的に活動する姿や対話する姿などが見られた。また、２学期以降に実施したため、どちらの学年の児童もタブレット端末の扱いに随分と慣れてきた様子が見られた。研究協議では、授業中の発問や対話場面の設定が適切であったか、ＩＣＴ機器利活用の展開は適切であったかという点について、全体協議及び検証を行った。協議内の話合いは多岐にわたり、教職員がお互いの考えや意見に触れ、実りのある話合いとなったと感じている。

図3　公開授業の研究協議

また、これまでの協議会形式と異なり、ポスターセッション形式でタブレット端末内アプリ「Google Jamboard」を使って行い、グループ協議の内容が可視化できるようにデジタル化している。

互見授業については、授業後にミニ研修と称して、授業に関する意見交換やＩＣＴ機器の利活用や作成方法を尋ね合う研修を行った。通常イメージする研究協議とは異なり、自由な話合いができる場にしたことで、情報交換や授業についての具体的な手法などの話が多く交わされたことは、授業改善をめざすための大きな財産となった。

（２）学力向上部との連携

今年度の全国学力学習状況調査や学力定着状況確認問題の結果を分析し、本校の児童の傾向について、全教職員で共通理解を図っている。その中で、本校児童に必要な基礎学力を身に付けさせるために何をするべきかなど、

全校体制で取り組むべき課題が明らかになってきている。今後、年度末に向けて、来年度のスタートがスムースに切れるように、全教職員で検証結果と具体的な手立てをまとめているところである。

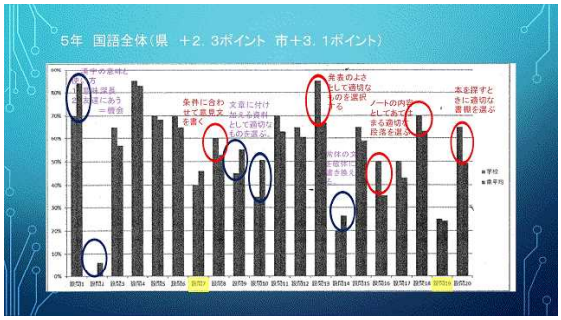

図4　学力相関の研究協議資料

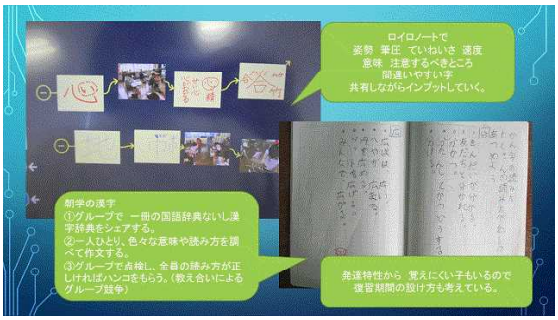

図5　今後の手立ての共有化

まずは、基礎基本（計算や漢字）の定着を図ることや学習規律など、当たり前のことを確実に実施していけるよう改めて再確認している。

また、今年度は、新たに始まったＩＣＴ機器を用いた授業づくりを中心に研修を行ってきた。年間を通じてミニ研修を頻繁に行うことで、授業に取り入れることへの抵抗感が少なくなり、全教員が積極的に利用することができた。また、この１年間で、児童も扱いに慣れることができている。

一方で、学力向上については大きな課題点が明らかになった。来年度は、その課題である「学習規律」や「基礎学力」に着目しながら、ＩＣＴ機器の効果的な利活用やポイントについて研修を深め、確実に児童一人一人の学力向上を推進していくのが、本校の必達目標でもある。

（３）ＩＣＴ機器の利活用に関する研修

今年度より、本格的に１人１台端末を用いた学習を行うに当たり、年度当初から情報担当と連携して、操作方法を伝えたり、それぞれの教職員が実践の中で得た利活用方法を伝え合ったりすることを、ミニ研修の中で行ってきた。「習うより慣れよ」の言葉どおり、教職員も児童も積極的に操作する取組を継続している。その結果、ＩＣＴ機器を用いる学習に抵抗なく全教職員が取り組めるようになっている。

さらに、ＩＣＴ教育支援員には毎月２回のペースで来校いただき、授業支援だけでなく、「Google Classroom」「Google Meet」などの効果的なアプリ利用についての研修を行った。このことは、日常における学習活動とは違うオンライン会議や授業を実施する場合にも有効である。

その一方で、ＩＣＴ機器を用いる情報スキルのレベルアップ、良質なアプリの選定、情報モラルの徹底についても、研修を継続していく必要性を感じている。デジタルだからこそできるＩＣＴ教育のよさを明確化して、本校児童一人一人の学びの質が、今以上に深化するよう取組を継続していきたい。

図6　校内研修だより